

現在における知覚表象と想起

福田 敦史 (Atsushi FUKUDA)

慶應義塾大学非常勤講師

過去の自分の体験を想起するとき、多くの場合において、私たちは、それが想起であることを直感しているように思われる。すなわち、現在の自分の意識経験が、例えば、想像でもなければ、単なる知覚でもなく、過去の体験の想起なのだ、と了解しているように思われる。この発表では、私たちの想起経験にこのような直感ないし了解が伴っているとしたならば、果たしてこれら直感・了解は何に拠っているのだろうか、という問題を取り上げる。

想起が想起であること、あるいはより広く捉えて表現するならば、記憶が記憶であることの根拠とみなせるようなもの、こうした「記憶の印 *memory marker*」というものに関する考察は、これまで多くの論者によってなされてきた。これまでに論じられたものには、例えば、*the feeling of warmth; intimacy; familiarity; pastness, the force and vivacity*、あるいは *autonoesis* といったものがある。

しかしながら、これらの候補において見られるように、想起しているときに現れている表象（記憶像・記憶表象）のうち、記憶の印を求めようとする試みは、満足いく成果をあげることがなかなか難しいようである。

例えば、おそらく哲学的に最も有名な記憶の印に関する考察として、ヒュームの *liveliness and vivacity* についてのもを挙げることができるであろう。これは、記憶に基づく観念と、想像に基づく観念とを区別するとされる印であり、ヒュームによれば、記憶に基づく観念は想像に基づく観念よりも、より鮮やかで、より生き活きとしており、時には、より詳細であるとされる。

しかし、ヒュームの挙げる記憶の印が不十分なものであることは、認めざるを得ないことであろう。私たちの想起経験を振り返ってみても、何かを想像している場合よりも、ずっとずっとぼんやりとした弱々しい記憶表象しか持てないことは珍しくない。そして、彼が提示する記憶の印が不十分であることは、実はヒューム自身が自覚していたことでもあるのである。

こうしてみると、記憶を記憶とするようなもの、あるいは記憶を想像から区別するような記憶の印というものを記憶表象のうちからア・プリオリに、あるいは記憶表象を内省することで、見いだすことはほとんど不可能であるように思われてくる。おそらく、ある記憶（想起）が、正当に記憶（想起）として見なせるか否かについては、それを内在的に決定することはできず、そうではなく、外的世界の様々な証拠と合致するかどうか、他者の証言などによって阻却されないかどうか、などといったことと照らし合わされて、最終的には外在的に決められることなのであろう。

以上のことを認めた上で、あえて、もう少し記憶の印というものについて考えてみたい。確かに、私たちは、決定的な証拠としての記憶の印を内在的に見いだすことは

できないように思われる。だが、その一方で、私たちが想起している時に、それが想起であるという、ある種の直感を（外在的に根拠づけることなしに）抱いていることも確かではないのか。だとしたら、私たちのこうした直感の源泉となっているものは何であるのか。この問いについて探求を試みることは、たとえその記憶の印が根拠としては不十分なものであったとしても、私たちの記憶（想起）というものの有り様について考えるうえで有益なことと思われる。

まず、想起表象・記憶表象だけをとりだして、そこをいくら探したとしても、記憶の印を見つけることはできない、ということは明らかだと思われる。

それでは、私が想起しているとき、それが想起であることは、いかなることから示されるのか。それは、現在の知覚経験とは独立にただ想起しているときにではなく、いま何かを知覚していて、そしてその知覚しているものについて何かを思い出しているときに、それ（想起）は知覚ではない、ということを示されるのではないだろうか。つまり、いま自分の知覚状況とはほとんど無関係に、例えば先週登山に行ったことを思い出すような場合ではなく、私が、例えば目の前の駐車場を知覚しながら、かつてその場所を通った時には公園だったことを思い出して「この駐車場は公園だった」と言うような場面において、「それ」が知覚ではない、ということを示されることが、記憶の印の原型なのではないか。言うなれば、いま現在の知覚とは異なることとして、想起が「いまリアルではないこと」として示されることが、記憶の印のひとつの源泉なのではないか。

しかし、さらに、この想起が「いまリアルではないこと」とはどういうことであるのかが説明されねばならない。というのも、想起ではなくても、「いまリアルではないこと」に関わる経験はあるからである。例えば、想像の場合であれば、想像している事柄は「いまリアルではないこと」と思われよう。また、「いまリアルではないこと」を「いま知覚できていないこと」と読み換えるならば、いま知覚している机の、その裏側の様子なども「いまリアルではないこと」とみなすこともできよう。それでは、想起の場合の「いまリアルではないこと」の特徴とは何であるのか。

この発表では、この問題に関しては、「一般的なもの」と「個別的なもの」という観点から区別を試みる。簡単に言ってしまうと、想起の場合の「いまリアルではないこと」は、想像や机の裏といった「いまリアルではないこと」とは異なり、必ず「個別的な」記述というものをもつということである。言い換えれば、想像や机の裏の場合、「aはFであると想像する」ときの記述Fは一般的な知識としての域を超えるものではないが、想起の「aはFであったと思い出す」場合の記述Fは必ず個別的な記述を（少なくともその核として）もつということである。

そして、現在なされる想起を、今ではない時としての過去へと関連づけるものは、「いまリアルではないこと」について個別的な記述をする、という想起のこの特徴に求めることができるのではないだろうか。つまり、今ではない時に個別的な経験をしておき、そしてだからこそ、現在知覚としてではない仕方（知覚は「いまリアルであること」について個別的な記述をすることであろう）個別的な記述ができる（想起する）ということではないだろうか。